

民俗行事・民俗芸能に見る鬼の形態

中
村
茂
子

はじめに

一 鬼の形態分類

二 現存修正会の鬼

1 野菜の仮面

2 姿を現さない鬼と未完成姿の鬼

ア 竹崎観世音寺修正会鬼祭

イ 太宰府天満宮の鬼すべ・玉垂宮の鬼会

3 裸形装束の複数鬼と家族鬼

ア 国東半島の修正鬼会（複数鬼）

イ 神戸市の鬼行事（複数鬼）

ウ 念仏寺（陀々堂）の鬼走等（家族鬼）

三 冬祭・雪祭・花祭・おこないの鬼

1 長野県坂部の冬祭と新野の雪祭

2 愛知県の花祭

3 静岡・愛知県のおこない

四 神楽の鬼

1 西日本の採り物神楽

2 東日本の神楽

五 小正月の来訪神

六 京都府の大念仏と福井・岐阜県の郷土能の鬼

七 風流芸の鬼

1 京都府のやすらい花

2 佐賀県の面浮立・岩手県の鬼剣舞

3 石川県の御陣乗太鼓・佐渡の鬼太鼓

4 愛媛県の牛鬼

八 摩陀羅神祭の鬼

1 京都府広隆寺の牛祭

2 茨城県楽法寺のマダラ鬼神祭

3 岩手県の蘇民祭

九 千葉県広済寺の鬼来迎

おわりに

はじめに

民俗行事・民俗芸能には、さまざまな扮装でさまざまな役割を負った鬼が登場する。これらの代表的な存在を各地の伝承の中で捉え、その扮装と採り物およびその役割について考察してみたい。現存の鬼行事・芸能に関する考察を進めるための前段階として、古く宮廷および中央寺院において行われていた追儺や修正会の鬼がどのような存在であったかを確認しておきたい。

追儺は中国の行事を取り入れたもので、奈良時代から宮廷の行事として冬至後の第三の儺の日（大晦日の前日）の疫祓いとして行われ、この日に土牛の図を門の四方に貼って陰気を祓う農耕儀礼も併せて行った。日本における追儺に関する文献の初見は、『続日本紀』推古天皇八〇七年一二月の条で「天下諸国疫疾。百姓多死。始作土牛大儺」と記されている。また、『日本三代実録』貞観一二年（八七〇）一二月の条に「大祓於朱雀門前。併追儺如常」と記されている。追儺において姿の見えない鬼を追う方相氏と彼に従う仮子の扮装については、『延喜式』卷一三「大舍人寮 追儺」の項に「方相氏仮面一頭へ黄金四つ目へ後帔赤両面四尺へ割注略。以後同様へ緋皂袷袍各一領。緋皂単裳各一腰へ略」。仮子八人。紺布衣八領へ略。楯一枚へ長五尺。広一尺五寸。棗一枚へ長九尺。緋幡一旒へ料帛二尺」と記されている。そのほか、平安時代における追儺の記事には『蜻蛉日記』に「儺やらひ」「鬼やらひ」とあり、追儺のことであると考えられる。また、『中右記』嘉承二年（一一〇七）一二月三〇日の条に、方相氏と仮子が貴族とともに儺を追った記事に「次方相へ略」、仮子、上卿、宰相、少納言、弁、次第列立南庭、方相立版位南、其南上卿立並へ略、陰陽寮十余人、立廻庭中、次読宣命、南殿中殿相兼、仍垂御簾、密々御覧觀、近衛中少将四五人許、候南簀子敷へ略、方相揚声打楯三度、方相出從殿上方、廻從本路へ略、宮中上下衆人追儺如常、京中人家相追之声遠、及子刻許退出」と記

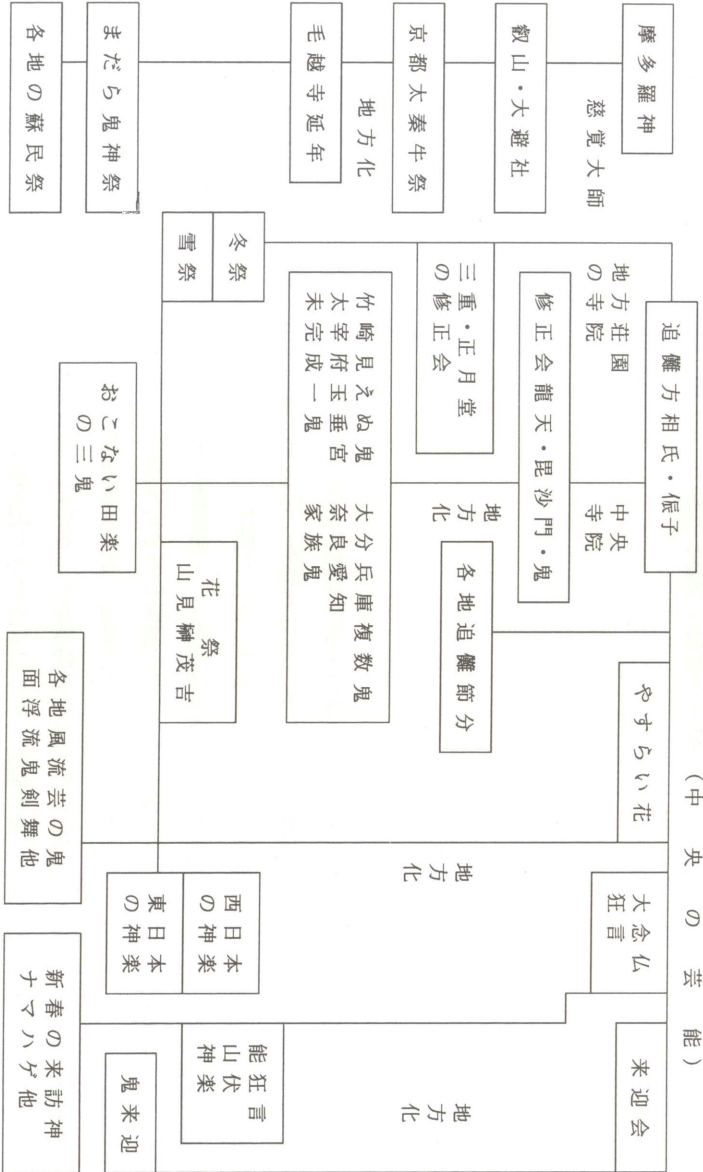
されている。しかし、その四年後、天永二年（一一一一）頃に記された大江匡房の『江家次第』には、殿上人が方相氏に弓矢を射かける様子が記されている。²⁾

平安時代の末期には、中央の寺院で行われていた修正会に鬼を登場させた記録が残されている。修正会の鬼に関する文献の初見は『中右記』大治五年（一一三〇）正月一四日の条で、円宗寺結願行事について「次第如常、龍天・毘沙門・鬼走廻之後、受牛玉印」と記している。また、『兵範記』仁平二年（一一五二）正月一四日の条、法勝寺修正会の記事では「龍天手、自東西出舞、次毘沙門手、自東出舞、次鬼」とあり、単に走りの行だけではなく舞と称される程度の演技を行っていたのは明らかである。同書仁安三年（一一六八）正月一日の条にも、円勝寺修正会結願に「次龍天、在乱声、次毘沙門、次鬼手、法呪師副廻之」と記され、「鬼手」には法呪師が付き添っていた。これらの記事に示された鬼は具体的にどのような扮装であったか不明であるが、龍天（鎮魔）、毘沙門（鎮魔・施福）に近い意味を負っていたと考えられる。

鎌倉時代になると鬼の意味に変化が見られ、『名月記』承元元年（一一〇七）正月一五日の条、法勝寺修正会の記事に「近習殿上人、頭中将已下、御共人濟々、是為打鬼也云々」と記され、貴族が鬼を打っていた。さらに、『平戸記』仁治元年（一二四〇）正月一四日の条、法成寺修正会の記事には「龍天毘沙門等参進、次鬼走、此間雜人競入狼藉無極」とあり、貴族が鬼を打った一方で一般参詣者が狼藉を働いたことを記している。

次に『勘仲記』弘安二年（一二七九）正月一四日の条、御堂修正会の記事として「龍天進、次毘沙門、次追儼、予於凡僧床以杖打鬼、追儼以前東南両面扉閉之、為無狼藉也、前々追儼之時以飛礫打入堂中」と記され、鬼走りを追儼と称していたこと、貴族が鬼を杖で打ったこと、参詣者の狼藉を防ぐために堂の扉を閉ざしたことがわかる。同書の正応二年（一二八九）正月一八日の条、蓮華王院修正会の記事に「次龍天、自左右参進、予催促之、次毘沙門、次追儼、鬼三人三匹、龍天持鉞追之更還仏前取餅退下」とあり、追儼は三匹の鬼が鉞を持った龍天に追われ、再び仏前に戻って供え

第1表 民俗行事・民俗芸能に見る鬼の形態的展開



物の餅を取ってから退出した。

鎌倉時代の修正会の記録にも鬼の具体的な扮装を記したものはないが、結願の鬼追い行事が追儼として意識され、龍天や僧、参詣人などが悪鬼を追い払う形式になっている。平安時代末期に宮廷の追儼式で貴族が方相氏を鬼として追ったことを考え併せると、修正会結願の鬼も追儼方相氏に近い扮装であったかもしれない。

右に記した宮廷行事の追儼および中央寺院の修正会からの展開として、現在各地に伝承されている鬼の行事・鬼の芸能を分類し、鬼の形態的展開図を作成した(第1表参照)。この表は筆者による現地調査のほか、各伝承地で発行している調査報告書やパンフレット等を基本資料として作成したものであり、筆者の現段階の考察段階を示すものである。今後の研究の進捗によって変化する可能性もあるが、本論では第1表に示した展開図にしたがって鬼の形態分類を行い、併せて採り物と鬼の役割について考察する。さらに現存行事・芸能の構成と鬼の役割を具体的に示すことで、分類内容を確認した。

一 鬼の形態分類

(1) 完成されない鬼

① 見えない鬼

(竹崎 鬼祭)

姿を現さない鬼(荒ぶる霊)を鎮圧して新年の豊作と豊漁を祈願する。大勢の裸形男が鬼の行状を代行する。

② 鬼の仮面

(正月堂 修正会)

野菜の鬼面（節句盛）を供物とし、後にこれを食して新年の豊作を祈願する。

（太宰府天満宮 鬼すべ）

鬼面使と鬼掛に囲まれた集団で行動する鬼に神官と氏子総代が豆を投げ、卯杖で鬼面を打つ追儺行事である。

（石手 蘇民祭）

七歳の弱体児が浄衣の背に鬼面を逆に負い、斧と槌を持って親族に背負われて行に参加、健康祈願をする。

③顔を覆う

（玉垂宮 鬼会）

麻の蓑で姿をかくし、赤熊の子供に囲まれた集団で行動し、社役に槌で頭を打たれる追儺行事である。

(2) 完成された裸形装束の鬼

①多数鬼

（長田神社 追儺式）

五鬼が名前に相応しい仮面と裸形を現す鬼衣を着し、筋肉を表現する鬼絡とフグリをつけ、斧などで餅割をし、氏子に分配して食することで新年の豊作を祈る。

（国東の修正鬼会）

災祓鬼・荒鬼・鎮鬼のほかに人間装束の鈴鬼が出る。三鬼が参詣者に加持をし、家々を祝福してまわる。

②家族鬼

（念仏寺 鬼走）

仮面・鬼衣・鬼絡の親子の三鬼が斧・念珠・槌を持って登場し、松明を翳して堂内を走り、鬼絡は厄除けの呪いになる。祖父母と孫が登場する愛知県滝山寺の場合も本尊に供えた餅と牛王杖を分配して豊年を祈願する。

③三鬼

(長野 雪祭)

赤い鬼衣に斧・槌を持った三鬼が祢宜との問答に負けて退散する。

(愛知 花祭)

赤い鬼衣、斧を持った山割鬼・榊鬼・茂吉鬼は多くの伴鬼を従え、榊鬼は祢宜に荒大狗と名乗り、年齢比べと榊引きに負けて退散する。これは荒ぶる土地神が人間に領地を譲り渡したのを示す。

(長野 冬祭)

たいきり面・鬼神面・天公鬼面・青公鬼面の四鬼が登場、たいきり面は獅子舞と同様の役目を負い、ほかの三鬼は祢宜との問答に負けて退散する。

(静岡・愛知 おこない)

斧・槌・金棒を持った三鬼と道化役が獅子舞と同様に祓い浄めの役割を負って舞う。

(茨城 マダラ鬼神祭)

赤い鬼衣に紫の袈裟を着け、鬼と僧体の中間的な装束をつける。

(京都 大念仏狂言)

閻魔の庁物では赤い鬼衣の地獄の鬼が登場する。能から取り入れた「紅葉狩」などの鬼は、鱗模様の人間装束で、子供が扮する家来鬼は黒紋付に鬼衣の股引姿などもある。

(3) 人間装束を着けた鬼

①舞衣

(各地の神楽)

中国地方の神楽で大きな鬼面と豪華な舞衣、杖を持つ「荒平」などの鬼は、太夫と問答をする舞の中で鬼の宝を渡す。九州の「山守」などの山の神や東北の「笹結」の鬼も同じ意味がある。

(郷土能狂言)

郷土能で特色ある鬼能の伝承として水海の田楽能舞と能郷の能の「羅生門」があり、意識的に最終演目で鬼退治をして良い年を祈願する意味が込められている。

(やすらい花)

仮面なし、赤熊に赤い打ち掛けで太鼓や鉦を打ちながら踊る大鬼と鞆鼓をつけた子鬼で疫神祓いをする。

② 浄衣

(京都 牛祭)

紙の面に浄衣、御幣を持った摩陀羅神と三つ股鉾を持った四鬼が出て国家安穩・五穀豊穰を祈る。

(石川 御陣乗太鼓)

鬼面に浄衣の者が一個の鉦留太鼓を交代で打ち、悪魔や敵を退散させる。

③ 鎧・胸当

(岩手 鬼剣舞)

かつてモッケ(物の怪)と呼ばれ、鬼面赤熊、胸当大口袴に手甲脚絆で採り物を持った集団が踊る念仏踊。

(佐渡 鬼太鼓)

鬼剣舞に近い扮装で両手に撥を持った鬼が交代で太鼓を打ちつつ踊り、その役割は獅子舞同様である。

(千葉 鬼来迎)

浴衣に杖を持った脱衣婆と、鎧を着けて腰に太刀を下げた赤・黒鬼が棒で亡者を責める。

④襦袢・股引

(佐賀 一面浮立)

腹の太鼓を打って群舞する豊年祝の踊りだが、寺や各戸巡りなどを行う根底に念仏踊の存在がある。

(4) 植物蓑笠の鬼

(秋田 ナマハゲなど)

仮面に蓑笠、出刃包丁や御幣を持った赤鬼・青鬼が年の変わり目に除災招福を目的に各戸を訪問する。

(5) 想像上の怪物

(愛媛 牛鬼)

胴体を赤布で覆い、一〇人程が入った怪物が各戸巡りをし、獅子舞同様悪魔払いをする。

二 現存修正会の鬼

1 野菜の仮面

正月堂観菩提寺(三重県阿山郡鳥ヶ原村)の修正会は別称厄除大餅会式ともいい、二月一日〜二日に行われ、節句之頭行事と正月おこないの二つの部分で構成されている。前半の節句之頭行事は在住民七頭(かつて九頭)の頭屋行事で、正月一三日の事始、二月四日の道具調べ、八日のお水取りから頭屋では別火・女人禁制などの潔斎生活に入り、九日の大餅搗で準備を完了する。

二月一日の献餅は、来年の頭屋(明頭)を正式に指名し、「大餅潔」で床の間に飾った五枚の大餅とその上に置いた節句盛(野菜で作った鬼面)を塩水で浄める。節句盛は蕎麦殻を棕櫚でくるみ、人参の角、蜜柑の目、栗の口と眉、

大根の鼻と耳で、最後にとり粉を塗って仕上げる。次に頭屋から行列を繰り出して観音堂へ練り込み、長老の指図で堂番に供物を渡し、本尊前に供物を荘厳して節句之頭行事を終了する。

一二日午後（かつては深夜）の正月おこないの行法は、①ほぞの木驚覚（練行衆の行道の最中に、裏堂で本尊厨子を牛王杖で打つ）、②守護文（呪師と大導師の問答）、③乱声（大導師の祈願文の時「乱声」と叫び、太鼓・法螺貝・銅鑼・牛王杖で音を立てる）、④達陀行法（水天、火天に扮した練行衆二名の行法へ乱声の中で水天、火天の行道で供物を潔斎し、相互にせめぎ合いつつ乱舞する）かつては八天であったという）である。寺の旧記によれば、この寺は天平勝宝三年（七五一）、実忠和尚が東大寺伊賀莊園拡張のために大和路の農民を移して観音堂を建立したのに始まる（三）^{（三）}。

頭屋は牛王法印が押された大餅一枚・牛王札・節句盛などの供物を受け、明頭に引き継ぎをして大餅・節句盛・牛王札などを各頭（七名）に分配する。鬼面（節句盛、供物の一種）を行事終了後在家の人々が分配して食することで新しい歳の豊作を祈願する。この野菜の鬼面から、修正会に出現する鬼本来の役割が見えてくる。即ち、鬼は豊年をもたらず歳神として出現するのである。

2 姿を現さない鬼と未完成姿の鬼

ア 竹崎観世音寺修正会鬼祭

竹崎観世音寺（佐賀県藤津郡太良町）の修正会鬼祭は、一九九二年から正月二、三日（それ以前は五、六日、旧暦の潮の具合で時間を定めた）に行われている。土地の伝承では竹崎の沖合に住む鬼と観音堂内の鬼箱に封じ込められた鬼が、年に一度満潮時に相互に呼応して島を転覆させようとするので、それを防ぐために村人が大声をあげて島を守る行事であるという。行事は、①観世音寺住職（院主と称する）と真言宗御室派の僧衆、②竹崎五区中の山内の世帯主（平

井坊に詰めて別火)、③竹崎居住の未婚青年(鬼の岩屋と称する若者宿に籠もり、裸形で出現する。その中四名だけは鬼副と称して赤衣〈背に白い井桁を染め抜いた法被〉を着ける)、④竹崎居住の既婚男子(宿老宿につめる)の四グループで行われる。

正月二日夜、平井坊から観音堂へ行列を繰り出し、本尊の前で初夜の行を行う。行は、院主を中心とした僧衆の般若心経、まね経、太鼓経、童子舞(大人の仮面を着けた少年二名の舞、最後に種蒔きが行われる)が入るフレイ経が唱えられ、平井坊へ下る。平井坊前にはサンカラの火が焚かれ、火を囲んで僧衆が読経しながらサンカラの火を巡る。赤衣を脱いで裸形になった鬼副四名が院主を担いで胴上げをするサンカラカクが行われ、以後裸形の若者四名が一組になって、僧衆・童子・総代・区長・希望者の順にサンカラカクをする。終わると大鍋に準備されたサンカラ雑炊を参詣者に配り、最後に行事に奉仕する者がサンカラの火を囲んで集まり、総代から名前を呼ばれて行事参加の確認をとられる。

三日午後、再度平井坊から行列を繰り出して観音堂へ登り後夜の行に入る。初夜と同様の本尊前の行に続いて庭の行になる。院主以下が庭に下りると鬼副の一人が堂の階から庭へ向かって束ねた大聖棒(牛王杖)を投げ落す大聖棒打ち切り(一回目)が行われ、参詣者が争って拾う。鬼副に抱かれて庭に下りた二名の童子の舞「天狗拍子」に続いて大聖棒打ち切り(二回目)、童子舞の「ヒサツキ」「ビシヤラモンボ」がある。次の「鉾突き」は、鬼副二名が鉾先を交差させた下を院主の先導で僧衆・童子がぐり抜け、続いて童子の「翁面」(杖の先に翁面をかけるだけ)「レンゲ」「五大忿怒王」で庭の行事が終了する。院主が堂に向かって「鬼ヨー、鬼ヨー」と呼ぶと、縄を十文字に掛けた鬼箱を持った四名の鬼副が庭に走り出し、同時に鉦・太鼓が鳴らされ、鬼箱を追って鬼の岩屋から大勢の裸形男が鬼副四名と激しく争いながら堂の周りを三周する。堂内に戻った鬼箱に鬼副が錠をかぶせて元の位置に納め、院主の法要があつて後夜の行を終了する。堂の梁に飾られていた二枚の大鏡餅を分割し、餅と幣を水引きで大聖棒に括りつけて家々に配る⁴。

この行事は、箱に閉じ込めた鬼の解放をめぐる赤衣を着けた鬼副四名と大勢の裸形の男が争い、鬼を鎮めて地域の

安泰と豊作・豊漁を獲得するためのものである。鬼箱を奪い取ろうとする裸形男は、鬼の姿と行動を代行し、鬼箱を守る鬼副四名はその代表であり成人式の青年の役で、鬼と人間社会の橋渡しをして行事を無事に遂行する役割を負っている。鬼副役を果たして一人前であることが認められる青年戒でもある。

イ 太宰府天満宮の鬼すべ・玉垂宮の鬼会

太宰府天満宮（福岡県筑紫郡太宰府）の鬼すべは、正月七日の夜に「うそかえ」神事に続いて行われている。この行事は、かつて通りがかりの者を鬼に見立てて郊外に追放した観世音寺の追儺祭から変化した安楽寺薬師堂（現在鬼が籠もる祓殿）の修正会を継承したものである。正月元旦から神職一同が斎戒沐浴して七日間に亘る神事を厳修し、満願の七日夜に六町（新町・五条・三条・連歌屋・馬場・大町）氏子の奉仕で鬼すべを行う。鬼警護（テン棒と称する木槌を持った新町・五条）と燻手（大団扇、カリ股と称する股本を持った三条・連歌屋・馬場）は筒袖法被に藁の鉢巻を角形に結んで櫛をつけ、「鬼じゃ、鬼じゃ」と叫びながら境内に参入し、燻手は神職から神聖な火種を渡されて境内に準備された松葉と藁の山に点火し、大団扇で煙を殿内に送り込む。殿内にいた鬼警護が、テン棒で三方（左右後方）の板壁を叩き破ると、四八ヶ所を荒縄で縛られて被り物をした鬼役が、鬼面使（鬼の仮面を持つ者）を先頭にした鬼掛に取り巻かれて出現する。鬼役は単体では完全な姿ではなく、鬼面使と鬼掛に取り巻かれた一団として機能している。この一団が殿内に入ると、太鼓の合図で燻手はさらに殿内に灰燻しを送り込み、鬼の一団が鬼堂の表面に姿を現す（七回半）度に神官が豆を投げつけ、卯杖で鬼面を打つ。続いて鬼の一団は殿外を三回巡り、氏子総代から豆を投げられ、面を打たれて終了する。

玉垂宮（福岡県久留米市大善寺町）の鬼会も正月七日の夜に行われ、社役と呼ばれている世襲の人々と氏子総代、および小松明を持った六名のテテブリに率いられた大勢の氏子（禪姿）が奉仕する。社役が社前を流れる霰川で身を浄め、汐井桶に水を汲んで神殿に入ると、小松明を持ったテテブリ以下も組ごとに川で身を浄めて神殿に詣でる「汐井

搔」を行う。午後九時、鐘の合図でテテブリ以下が六本の大松明の下に集合、テテブリが大松明の上で小松明を振り回して消すと、本殿から運ばれた鬼火が一番松明に点火され、残り五本の大松明にも次々と点火される。鬼堂前の仮設舞台（かつては地面）で鉾面神事（①「鉾取った」―左右に対峙した天狗へ鬼とも）面の者が二・三度鉾を合わせへ鉾取った」と叫ぶと、鉾持役が鉾を奪い取って鬼堂に駆け込む。②「面取った」―天狗面の両者から鉾持役が面を取りへ面取った」と叫んで鬼堂内に持ち込む。③「ソラヌイダ」―天狗面を取られた両者が対峙して太刀を抜くと鉾持役がへソラヌイダ」と叫ぶ）が行われる。次に子供たちの鉦・太鼓の乱打で一番松明を先頭に六本の大松明が境内を回り始め、赤熊に麻の被り物をつけて棒を持った子供たちが鬼堂を取り巻いて板壁を叩き、麻の蓑を頭から被って鬼堂に籠もっている鬼の出現をうながす。鬼は赤熊をつけた子供たちに囲まれて鬼堂を七廻り半し、社役の一人が供物の丸餅を藁つとに入れて腰にさげ、鬼堂の入り口に立って鬼の一団が堂を一周する度に袂に餅を移して数取をし、同時に小槌で鬼の頭を打つ。この槌で叩いてもらうと一年間無病息災に過ごせると伝えられ、参詣者が叩いてもらう。鬼の一団が堂を廻り終わる頃大松明が鬼堂の横に来て、鉾面神事役の一人が長い松明を二本両手に交差させて持ち、一番松明に近づいて火を移して地面で消す。これを「火取り」といって松明回しの終わりを示す⁶⁾。

鬼すべと鬼会は正月の火祭りとして有名であり、勇壮な男たちの松明行事が盛大に行われている間に、鬼の一団が参詣人に姿を見せずに密かに暗い堂を巡り、元の位置に戻される。これら密かに姿を現す鬼の一団は、竹崎観音の姿を見せない鬼と次に記す国東半島の裸形装束の鬼との中間的な存在として位置づけることができる。

3 裸形装束の複数鬼と家族鬼

ア 国東半島の修正鬼会（複数鬼）

大分県の国東半島には、現在次の三ヶ寺に修正鬼会が伝承されている。①天念寺（豊後高田市 西組 旧正月七

日)、②成仏寺(国東郡国東町 東組 隔年の旧正月五日)、③岩戸寺(国東郡国東町 東組 隔年旧正月七日)。土地の伝承では修正鬼会の起源は、国東六郷満山を開いた仁聞菩薩が養老年間(七一七〜七二四)に二八ヶ寺の天台僧を集めて「鬼会式」六巻を下賜、これを拝受した各寺々で大法要を厳修したのに始まり、かつては各寺々で厳修していたという。

現行では鬼が最後に出現し、三ヶ寺ともまず人間の仮面をつけた男女(成仏寺のみ白・黒面)の鈴鬼が登場し、鬼招きを目的とした法舞を演じる。その後天念寺・岩戸寺では災祓鬼(赤・右手斧・左手松明)と荒鬼(黒・右手太刀・左手松明)、成仏寺だけが災祓鬼(赤・右手斧・左手松明)、荒鬼(赤・右手太刀・左手松明)、鎮鬼(黒・右手槌・左手松明)の三鬼が出現する。鬼役の僧は、次第半ばの「神分」が終了したところで愛染堂に行き、タイレシの手伝いで鬼装束をつける。仮面に麻布半纏、股引、白足袋、草鞋で、胴・腕・脚の一二ヶ所(閏年一三ヶ所)を藤かづらの繊維で縛り、背に鈴をつける。鈴鬼の鬼招きで本堂に登場した三鬼は、仏前で院主から浄めを受けて庭に出て「鬼走り」の秘法を行う。次に八名のタイレシと三鬼が手をつないで輪をつくり、鬼は輪中の参拝者を松明で軽く叩いて加持する。輪を解いて「火合わせ」の後、災祓鬼から順番に本堂の裏山にある六所権現に参拝、一度本堂に戻ってからタイレシを従えてそれぞれ定められた村組(上・中・下)の家々を巡って仏前で祈禱して廻り、本堂にもどる。災祓鬼が戻らないとほかの二鬼(荒鬼・鎮鬼)は堂内に入れず、三鬼揃った明け方に院主の鬼後呪が行われる。暴れ回る鬼は、鬼鎮の餅をくわえさせられ、愛染堂で鬼の戒めが切られて僧の姿で本堂に入り、院主の太刀による呪法を受けて終了する⁽⁷⁾。

この行事には二種類の鬼が登場する。一種は人間装束の鈴鬼(二名)であり、一種は鈴鬼の招きで出現する三鬼(または二鬼)である。後者は鬼の裸形を表現した装束であり、胴・腕・脚を縛ったスタイルは、本来鬼の裸体の力強さを示す目的であったと考えられる。三鬼がそれぞれ斧・太刀・槌を持つことにも注目しておきたい。

イ 神戸市の鬼行事（複数鬼）

一九九五年に起こった阪神大震災以前の神戸市には、長田神社（長田区）追儺式（二月二日（三日）を初めとして須磨区妙法寺（一月三日）の鬼踊、垂水区転法輪寺（一月七日）・明王寺（二月四日）・多聞寺（一月五日）の鬼追、同区太山寺（一月七日）・性海寺（一月二五日）・近江寺（一月一日）の追儺式が行われ、既に廃絶していた行事四ヶ所を含めて合計一二ヶ所の伝承があった。震災の被害が特に大きかった長田区では、長田神社追儺式を九六年だけ中断、九七年には復活した。九三年に現地調査を行った長田神社追儺式の鬼装束を記す。

長田神社追儺式は七鬼が登場し、一番太郎（その名称がついた仮面に薄茶色の鬼衣・頭巾・襷、腕と脚に四ヶ所ずつ一六ヶ所を麻紐で縛り、晒しで作った大きなフグリを付けて腰に小太刀を差して松明を持つ）・姥鬼・呆助鬼も一番太郎に同じ。赤鬼（赤い鬼衣と頭巾・襷、ほかは一兼太郎に同じ）・青鬼（青い鬼衣と頭巾・襷、ほかは一兼太郎に同じ）・尻くじり鬼（角のある黒仮面、槍を持ち槌を腰にさす。ほかは一兼太郎に同じ）・餅割鬼（四本角の赤鬼面、黒い紐で胴に鬼がらみをしてその紐で小太刀を差した下に大太刀を下げ、右手に松明、左手に鉞を持って登場する。ほかは一兼太郎に同じ）である。

先に記した五鬼は五名の太刀役（少年）と太刀の受け渡しを行い、尻くじり鬼と餅割鬼は、その名称が示すように斧と槌を使って餅割（拝殿の梁に飾られた日月の餅と舞台上に置かれる一二ヶ月の餅）を行う。尻くじり鬼は、餅割鬼のフグリを槍でなぶる。フグリをなぶる振りには花をまき散らそうとする意味が込められており、太刀役は他地域の伝承に見る棒を持った子鬼の変形であろう。神事終了後、神官が一二ヶ月の餅を七名の鬼役と太刀役の代表（肝入）など一二名に一枚ずつ渡し、一二名は開き扇で餅を受ける。代表が持ち帰った餅は氏子に分配され、これを食して新しい年の天下泰平と五穀豊穡を祈願する。この行事の鬼は、人々に幸せをもたらす歳神と考えることができる。神戸市の鬼行事に関わる伝承の詳細については別の機会での発表を準備している。

ウ 念仏寺（陀々堂）の鬼走等の家族鬼

念仏寺（奈良県五條市大津町）の鬼走は、一月一四日の修正会結願行事として行われている。念仏寺はかつて旧坂合部村一二ヶ村の氏寺であったが、現在では真言宗に属する無住の寺で、行事は旧坂合部村に属していた人々が伝承している。諸役はカッテ（火手）一名、三鬼（父―赤 右手斧・母―青 右手念珠・子―赤 右手槌）、スケ（佐）三名、そのほかカワセ、貝吹、太鼓打、棒打などである。行事は一月八日、三鬼役の別火に始まり、鬼役は諸役の協力で一四日までに腕・脚に巻くカンジョーリ・松明・餅などを準備する。一四日は正午頃から堂裏の板壁を二本の棒で叩く「阿弥陀さんの肩叩き」が始まり、午後一時に火打町西金寺の住職が導師となって僧衆による大般若経六〇〇巻の転読、昼の鬼走（点火しない大松明を持って、夜同様に堂内を三周）の後に福餅撒が行われる。午後七時、導師の採燈護摩、九時頃にカッテの先導で三鬼が入堂、カッテが大松明の火伏せを行う。堂内から出現した三鬼にスケが大松明を渡して堂を三周する。鬼が堂を下りると参詣人は鬼の腕と脚一六ヶ所に結びつけられたカンジョーリを奪い合い、痛み除け、厄除けの呪いにする。

三鬼の面には、「別当 頼澄僧都 文明十八年（一四八六）〈以下略〉」という墨書銘があり、さらに永禄一一年（一五六八）の記録によって、この当時松明を準備したことがわかり、江戸時代以前から松明を使用する家族鬼の行事であった。⁽⁹⁾

両親と子供ではないが、滝山寺（愛知県岡崎市滝町）の修正会鬼祭（一月七日夜）では、祖父鬼（赤―右手大鉞・左手松明）・祖母鬼（赤―右手撞木・左手松明）・孫鬼（赤―右手小鉞・左手松明）が出現し、本堂の外陣および縁側を淨衣に身を包んだ数十人の松明持ちとともに走りまわり、最後に鬼が供物の餅を持って走る。

複数鬼・家族鬼は、仮面に裸体を示す鬼衣の上から鬼絡みをし、採り物として松明と鉞・槌・太刀・棒・念珠などを持ち、加持をした餅を氏子に分配するための重要な役割を果している。

三 冬祭・雪祭・花祭・おこないの鬼

1 長野県 坂部の冬祭と新野の雪祭

冬祭（長野県下伊那郡天竜村坂部）は正月四日から五日にかけて行われ、四日夕方に火王社（下の森）から諏訪神社（上の森）へお練りがあり、五日午前四時頃まで湯立と舞が繰り返される。夜半過ぎに改めて火王社から面形（たいきり・獅子・鬼神・天公鬼・青公鬼・水王様・火王様・翁・日月・女郎）が迎えられた午前四時頃、まずたいきり面（赤鬼・鉞）が前後を松明振り二名に挟まれて舞場に出現、五方拝をする。獅子舞がはさまって、鬼神面（赤鬼・棒）が登場して五方へ三・三・九度に舞って祢宜と問答（年齢比べ）をして負かされ、棒を取られてゆわぎ・鈴・扇を渡されて祝福の舞を舞って棒を返してもらう。鬼神面が退場しないうちに天公鬼面（赤鬼・撞木杖）が出て二鬼で釜のまわりを三周して背中合わせ（背比べ）になり、鬼神面が退場する。天公鬼面も祢宜との問答に負けて撞木を取られ、舞って撞木を返してもらう。次の青公鬼面（青鬼・六角杖）も同様にして退場。次に水王様（しずめ様とも・黒天狗面）が湯釜の火を鎮め、神聖な湯を周囲に振りかけ、火王様（赤天狗面）が湯釜を巡って再度火を起こし、火と水を治める呪法を行うこの二面が最も神聖視されている。次の翁面では祢宜との間で滑稽な問答があり、日月面・女郎面は、土地の人々によって「てらばこ」とも呼ばれる道化舞を演じる。海道下り・魚釣り・餅投げがあつて、朝食後面形を火王社へ送る。冬祭の鬼は、たいきりめん面と獅子の役割が後に記すおこないの鬼と同様であり、鬼神面・天公鬼面・青公鬼面が祢宜との問答に負けて退場するのは後に記す雪祭の鬼と、また、水王様・火王様が重視されるのは三重県正月堂の水天・火天に通じるものがある。

雪祭（長野県下伊那郡阿南町新野）は一月一四日～一五日にかけて行われる伊豆神社の祭礼で、庭の芸の一種として

出現するテンゴ（天狗・鬼様とも）は、赤い鬼衣に鬼面の太郎（斧・次郎（両槌）・三郎（片槌））で、祢宜との問答（年齢比べ）に負けて退出する。三鬼の役者は、御旅所からの行列を松明を持って迎える役目を果しており、鬼が先住の土地神であることを示している。この三鬼は、次に記す愛知県花祭の鬼とも同様であり、鬼役でありながら天狗と同一視された存在は、冬祭の水王様・火王様とも通じている。

2 愛知県の花祭

現行花祭の次第を愛知県北設楽郡東栄町月（二月二日～三日）の場合で記してみよう。舞の次第は、①撥の舞、②さるごばやし・とうごばやし・しきばやし、③御神楽、④一の舞、⑤地固、⑥花の舞（並行で神鬼の庭入りと中申し）、⑦山割鬼（赤―鉞）、⑧三舞、⑨神鬼（赤―神・鉞）、⑩ひのねぎ、⑪おつるひやら、⑫みこ、⑬四舞、⑭願主の舞、⑮翁、⑯茂吉鬼（赤―槌・鉞）、⑰湯囃子の舞で、前後の神事を加えると約三〇時間の大きかりな構成である。鬼は多くの伴鬼を除けば山割鬼（伝承地によっては山見鬼とも）・神鬼・茂吉鬼（朝鬼・四つ鬼とも）の三鬼として理解され、伝承地によっては茂吉鬼とは別に朝鬼を白、神鬼を赤、山見鬼を青、茂吉鬼を黒、伴鬼を黄という五色の鬼を登場させている場合もある。舞庭に登場する鬼は、仮面に鬼の着込みをして帯と襷のほかに足結び・手結いに草鞋履きである。⁽¹⁾ 山見鬼は改め役との「山見問答」で「荒みさき、荒天狗」と名乗り、「山見物に来た」ことを語る。そして「びゃっけあおり」「松明割」「釜（山）割」などの所作で祭場である山を荒らす。しかし、これは乱暴ではなく祝福の所作である。⁽²⁾ 神鬼は改め役との「神問答」で「荒天狗」と名乗って年齢比べに負け、神引にも負けて神を改め役に渡して反問を踏む。神は山の象徴であり山の神としての神鬼が、人間に山を渡したことを意味する。反問は花太夫が最後に行う「しずめ」の反問と共通し、大地を鎮め豊穰を招き寄せる呪術であり、神鬼は除災招福をもたらす山の神と考えることができる。

花祭最古の記録である天正九年（一五八一）本によれば祭に鬼が出現するのは二回で、次第の中では獅子・翁に続いて出現、また、大神楽の「浄土入り」に際して冥界の魔物として松明とともに出現し、当時の鬼にはまだ名称がないとい⁽¹³⁾う。したがって、現行のような三鬼の構成は江戸時代以後と考えられる。

3 静岡・愛知県のおこない

懐山のおこない（静岡県天竜市懐山新福寺阿弥陀堂）は、一月三日（かつて五日堂と呼ばれていた）に行われている。ほかに静岡県・愛知県の各地に分布している同系統のものに、引佐郡引佐町川名福万寺薬師堂のおこない（一月四日・かつて八日堂）、同町寺野宝蔵寺観音堂のおこない（一月三日・かつて三日堂）、同町波川万福寺薬師堂のおこない（廃絶・かつて四日堂）、愛知県南設楽郡鳳来町黒沢峯福寺阿弥陀堂の田楽（一月六日・かつて六日堂）などがある。右のカッコ内に示した三日堂〜八日堂という呼称は、かつて芸能の伝承者が移動しながら演じていた可能性を示しているとい⁽¹⁴⁾う。

懐山のおくないの「鬼の舞」について記し、ほかの伝承と比較して見たい。現行懐山のおくないは、神事の後阿弥陀堂の外陣で次の次第で芸能が演じられる。①神の舞、②三つ舞、③槍の舞、④片剣の舞、⑤宵の獅子、⑥女郎の舞、⑦鬼の舞、⑧駒の舞、⑨猿の舞、⑩年男、⑪塩買、⑫綿買、⑬両剣の舞、⑭槍の舞モドキ、⑮片剣の舞モドキ、⑯両剣の舞モドキ、⑰田植・しるかけめし（泰蔵院本尊前）、⑱稲叢、⑲悪魔祓、⑳夜明けの獅子、㉑舞納の後餅の拝受が行われる。

⑦「鬼の舞」は、筒袖上衣にかかるさん袴、小さい猿面を顔面からずらしてつけた招き役に先導されて赤・青・黒の色に柄物の鬼衣に面をつけた三鬼（赤―鉞・青―槌・黒―金棒）が登場し、五方拝の後三角形に向き合って二鬼が一鬼の肩を打つ所作、肩を組んで順逆に廻る所作があって退出する。現行芸能次第には多くの省略や入れ替わりがあり、

第2表 <懐山のおくない> 演目復元試考 (注(15)参照)

演	目	現行	安政本・ほか	演	目	現行	安政本・ほか
1	舞剣ぎ	○		23	打(口)		△
2	剣も	○		24	田(水)		△
3	も	○		25	打	○	△
4	ど	○		26	拵		△
5	ど	○		27	打		△
6	ぎ	○		28	洗		△
7	(き)	○		29	種	○	△
8	子	○		30	鳥		△
9	舞	○		31	肥		△
10	竹	○		32	麦		△
11	四		○	33	田	○	△
12	節		○	34	屋		△
13	の		○	35	種		△
14	の		○	36	い		△
15	か		○	37	山		△
16	が		○	38	猿		△
17	げ		△	39	桑		△
18	舞	○		40	糸		△
19	舞	○	○	41	綿		△
20	舞		△	42	塩		
21	男	○	△	43	明	○	
22	打		△	44	の	○	
				45	魔	○	
					獅子	○	
					破		
					納		

伝承地に残された江戸時代の詞章本やほかの伝承から八木洋行氏によって作成された「懐山のおくない」演目復元試考」と比較してみよう¹⁵⁾(第2表参照)。

第2表に示した45番の復元試考の演目構成と現行の構成を比較すると、現行では復元試考に見られる11番〜16番、19、20の猿楽系芸能演目、22番〜31番、34、36、38、39番の田遊の演目がないこと、順番が大幅に入れ替わっていることを指摘できる。復元試考の次第では「劍・槍・鬼・宵の獅子」の後に「翁・松かげ」など猿楽系芸能が続いて、その後には田遊があり、最後に「夜明けの獅子・悪魔祓い」という構成になっている。

寺野宝蔵寺観音堂のおこない(三日堂)の現行次第は、①御神楽、②三舞、③片劍・もどき、④両劍・もどき、⑤火の玉、⑥鉾の舞、⑦粟穂の舞、⑧杵の舞、⑨女郎の舞、⑩翁、⑪松影、⑫獅子の舞、⑬鬼の舞、⑭ねこざねであるが、安永八年(一七七九)の記録では、⑤ねこざね(しずめの舞)、⑥しし併まねき、⑦おに併まねき、⑧おに併まねき、⑨しし併まねき、⑩ねこざねと千秋万歳で終了している。¹⁶⁾⑦と⑧の間に翁・松かげ・田遊などがあり、この構成は基本的に「懐山のおくない」演目復元試考」と同様で、愛知県黒倉の田楽も同様である。したがって、この地域に見られるおこないの「しずめ・鬼・獅子」は、悪魔祓い・場清めといった役目を負って演じられ、最も重要な演目とされているのは翁・松かげ・田遊など猿楽系および田楽系の芸能であることがわかる。

四 神楽の鬼

1 西日本の採り物神楽

中国地方に広く分布している採り物神楽(出雲系神楽)の演目には、「荒平」「関」「鬼返」「柴鬼神」「提婆」「世鬼」などに鬼が登場している。これらの鬼は巨大な鬼面と豪華な舞衣で両端に紙垂のついた杖を持ち、神主または太夫との

問答を中心とした動きの少ない舞を舞う。伝承地によってはこの杖をしはんじょう（死反生・死繁昌）の杖と呼び、再生と豊穡をもたらす呪力のある杖と伝えている。舞庭に現れた荒平は神主の問いに答えて、「人に似ぬ姿と声・早い移動・管理山の柴を眠っている間に盗まれ、探していると柴を囁す声に導かれて来た。四人兄弟の末子・荒神・みさき・外道」であると語り、神主に降参して鬼の宝（延命の小袋・隠れ蓑隠れ笠・霞の鞭・打出の小槌・浮き沓沈み沓へがねの沓）・飛び車・杖（差す杖引く杖）を渡す。これらの宝物をセットで数えるのが基本型であるが、場面によって欠けたり別の宝が加えられたりさまざまに変化し、鬼はそれぞれの宝についてその謂れを語る。しはんじょうの杖は、「上太き方をもって死したる人をなげたらば活きて繁昌します。細き方をもって七八十の老人をなげたれば十七、八にも若やぐとや、中にこめたる瑠璃光にては諸々の罪煩惱を断するものなれば是を汝にとらするぞ」といって杖を神主に渡し、神主からは太刀を渡されて太平楽の舞を舞って終了する。このような内容を記した神楽能本は、中世後期から近世初期に記され、社家や旧家に伝承されていたものが知られている。⁽¹⁷⁾

右のような形式の神楽は、九州地方に分布している神楽演目の「宿借り」「山人」「門問」「山守」などにも近い芸態であり、山の生命力を現す榊柴を持参して村を祝福に来る山人は、柴鬼人・荒平などと共通した性格である。さらに、花祭や冬祭・雪祭の鬼、および宝数えをする翁とも関係がある。

2 東日本の神楽

門屋光昭氏によれば、岩手県大船度市および宮城県各地に分布している法印神楽の演目「笹結」は、諸国を荒らし回る五鬼王（五鬼大人）を神武天皇が退治する物語で、五鬼王は背に笹をつけ手に杖を持ち、途中で舞台を下りて民家を巡って仏壇を拝してから再び演技に戻るといふ。また、岩手県花巻市と北上市に分布している大乘神楽の「笹結」「鬼門」などに鬼は登場しないが、かつては法印神楽の「笹結」と同種の演目であり、これらは西日本の「荒平」系統

の展開型と考えることが可能で、その理由として法印神楽はかつての里修験が伝え、権現舞は伝承していないが大乗飾り（白蓋）の下で舞われる神楽であったことをあげておられる。¹⁸⁾大乗神楽は権現舞を中心とした山伏神楽であり、かつての修験系の人々が演じてきた獅子神楽であるが、大乗飾の下で演じていたことを現す種目名であるならば、「笹結」が「荒平」の展開型である可能性もあり得ると思う。

一方、岩手県の山伏神楽・秋田県の番楽・青森県の能舞に見られる「鐘巻」は、本流能「道成寺」の古態を伝承したものとといわれ、般若の面をつけて登場する鬼も本流能に近い。

五 小正月の来訪神

花祭や冬祭・雪祭の鬼が人間との問答にやぶれて除災招福の役割を果たしているのに対して、年の変わり目の夜に出現する各地の鬼は、最初から除災招福を目的として家々を巡る。この行事は広範囲の地域に分布し、特に秋田県男鹿半島のナマハゲが有名であり、一月三一日から元旦（かつて旧正一四日～一五日）に青年たちによって行われている。ナマハゲは、男鬼（赤―出刃包丁に手桶または幣束）と女鬼（青―同様）が二～三鬼一組となって全戸を巡る。扮装は箆に紙を貼って色を塗り、馬の毛で髪や髭をつけた鬼面に藁と海草で作った蓑と腰巻という素朴なもので、沓のまま家にあがって「泣く子はいないか。怠け嫁・怠け婿はいないか。いればもらって行くぞ。ウオー」などといって家の中を巡って部屋／＼を反問して廻り、最後に酒肴でもてなされる。ナマハゲは新春を迎えるに際して災厄を祓い、祝福を授けに訪れる遠来の神として信仰されており、山岳地帯に天台系修験の道場があった時代に修法の一種として行われるようになったと伝えられている。

同種の行事は日本海側で石川県の能登半島や新潟県村上市に分布するアマメハギ、山形県のアマハゲ、太平洋側でも

岩手県のナモミ・スネカなどがあり、伝承地によっては子供が中心となっている。また、鹿児島県甑島のトシドンも同種の行事であるが、本州の行事との違いは、前者が戸主を通して問答してから酒肴をご馳走になるのに対して、後者は子供たちと直接問答をして餅を与えて帰ることである。本来は餅などの年玉を与えて立ち去る形式であったものであろう。

六 京都府の大念仏と福井・岐阜県の郷土能の鬼

京都には壬生寺の大念仏狂言（四月二日～二九日）、および嵯峨清涼寺釈迦堂、千本閻魔堂にも大念仏狂言が伝承されている。壬生寺では大念仏会の期間中毎日境内の狂言堂（大念仏堂とも）で最初に「炮烙割」が演じられ、毎日多数の炮烙が割られる。炮烙は参詣者がその年の節分に購入し、願い事を記して置いたものを割って厄落としをするのである。続いて数番の狂言が演じられ、これらは結願日に演じられる「棒振り」以外はすべて仮面を着け、同じく結願に行われる「棒振り」「湯立て」以外はすべて無言であり、囃子は鱧口・太鼓・笛で独特のリズムが演奏される。

壬生寺の伝承によれば、正安二年（一三〇〇）の疫病流行に際して壬生寺中興の祖である円覚上人十満が鎮花祭と融通念仏の作法を組み合わせた法会を催し、鬼の「棒振り」や「湯立」を行ったのに始まるという。この起源説の真偽はともかく、従来大念仏狂言の文献上の初見は『実隆公記』文明一七年（一四八五）とされてきた。しかし、山路興造氏は右の記録が勧進猿楽のことであり、現在のところ史料的に早いのは永祿四年から六年（一五六一～六三）頃の千本閻魔堂の景観を描いた狩野永徳筆、上杉家本洛外図屏風であることを指摘されている。この屏風は、千本閻魔堂表面の舞台で閻魔大王の前で首に縄をうたれた罪人が、側次様の装束を着けて右手に棒を持った鬼に責められている場面である。この演目は現行「閻魔の庁」と考えられ、毎日初番に演じられる最も重要な曲であり、鬼は仮面に赤熊を付けて

赤着物と袴の上から白い側次を着け、紅白段だら模様の手持を持っている。さらに山路氏は、壬生寺大念仏の特色である猿の曲芸に関する史料の初見が元龜二年（一五七一）で、壬生寺に残されている室町末期の三仮面が猿の曲芸および闇魔庁で責められる亡者の面として使用されたと考えられることから、大念仏狂言の創始は元龜年間（一五七〇～一五七三）頃とするのが妥当であり、現存史料上からは大念仏狂言の闇魔物は宗教活動の方便として猿楽の地獄責問劇が移入され、環境に合わせた演出が工夫された可能性が高く、本格的に能狂言の演目を取り入れて大念仏独特の演出で見せるようになるのは一七世紀後半になってからであるという⁽¹⁹⁾。当然のことながら、現行大念仏狂言に見られるさまざまな鬼の扮装も江戸時代になってからの工夫である。

そのほか、猿楽能を摂取した郷土能の中で特色ある鬼能を演じている伝承地に、水海鷲甘神社（福井県今立郡池田町）の田楽能舞（二月二五日）と能郷白山神社（岐阜県本巣郡根尾村）の能（三月二日）がある。両者とも芸能の最終演目として「羅生門」を演じており、意図的に鬼の登場する演目で締め括っているのは、春の初めに行う豊作祈願の祭りであることを意識した構成であり、鬼の扮装は本流能に準じている。

七 風流芸の鬼

1 京都府のやすらい花

やすらい花は、京都市北区紫野今宮神社境内社の疫神社の祭礼（四月第二日曜、かつて旧三月一〇日）に行われる疫神送りの芸能である。やすらい花が記録に見えるのは、『百鍊抄』久寿元年（一一五四）四月の条で、紫野において京中の児女が笛・鼓を奏し、夜須礼と称する風流の遊びを繰り出し、勅令によって禁止されたことが記されている。また、平安時代の末期に源資時によって完成された『梁塵秘抄口伝集』巻一四には、久寿元年三月に京近くの者が紫野社

で風流の遊びをし、傘の上に花を乗せたものをだして、数十人の童子がはんじり（小狩衣のこと、本来は身分の高い家の子が着用した）を着けて胸に鞆鼓をさげて拍子に合わせて乱舞したこと、悪鬼と称して首に赤い垂れをさげ、舞楽「貴徳」の鯉口面をつけて「二二月のおにやらい」のような出で立ちでおめき叫び狂い、「やすらい花ヤ」という囃子詞の田歌（大嘗会田歌の美濃の歌）が歌われたこと、やすらい花が何故禁止されたのか理由がわからないことなどが記されている。⁽²⁰⁾この記事によって、平安時代末期のやすらい花の鬼が「貴徳」の鯉口面をつけた追儺方相氏のような姿であったことがわかる。また、鬼を囃した五〇〜六〇人の鞆鼓童子は方相氏に従った仮子を想定した存在で、現在の小鬼の前身と考えることができる。「貴徳」の鯉口面を使用した理由は、この仮面を使用した時だけ番子が登場して貴徳を笑う演出がなされていたためであろう。

現行のやすらい花は、上野地区（今宮やすらい会）・雲林院・上賀茂・西賀茂の四ヶ所から行列を繰り出す。上野地区の場合によれば、大鬼四鬼と小鬼四鬼が二鬼づつ四鬼一組となって宿から行列を繰り出し、途中家々の門や辻で踊りながら疫神社に行き、疫神塚に悪疫を封じ込めた後に宿へもどる。大鬼は二鬼が赤熊をつけて左手に太鼓、右手に撥を持って打ちながら踊る。ほかの二鬼は黒熊をつけて左手に鉦、右手に撥を持つ。四鬼とも仮面なしで白の襦袢着流しの上から赤い打ち掛けをはおり、手甲、鉢巻き、白足袋、草鞋履きである。小鬼四鬼は、いずれも仮面なしで赤熊の上から烏帽子を被り、白襦袢に白袴の上から赤い打ち掛けをはおり、手甲、白足袋、草鞋履きで腹に鞆鼓をつける。

江戸時代の資料に見るやすらい花は、仮面をつけた鬼が登場していたようで、正徳四年（一七一四）刊『都名所車』の挿し絵には花傘を中心にした行列に赤熊と鬼面をつけた四鬼が描かれ、二鬼が太鼓と鉦を左手に持ち右手の撥で打ち、ほかの二鬼は段だら模様にある棒を持ち、裁着け袴に側次様の姿で描かれている。また、宝暦七年（一七五七）刊の「内裏雛」にもほぼ同様の挿し絵が描かれている。⁽²¹⁾この挿し絵に近い鬼装束は、先に記した千本閻魔堂大念仏狂言の「閻魔の庁」に登場する鬼であり、現行やすらい花の太鼓・鉦を奏しながら踊る大鬼と鞆鼓をつけた小鬼の姿に

定着したのは江戸時代中期以後という証明の一つになる。しかし、鬼が楽器を奏しつつ踊るスタイルは、中世の成立である『大江山絵詞』に見る「鬼の田楽」などの影響を考へることも可能である。

2 佐賀県の面浮立・岩手県の鬼剣舞

九州地方、特に佐賀県には浮立と呼ばれる踊りが分布し、伝承地によって踊浮立・行列浮立・鉦浮立・面浮立などの芸態を示した種目名、八俣浮立・広瀬浮立など、伝承地名を冠した種目名などがある。音成の面浮立（佐賀県鹿島市音成天子神社祭礼 九月第二日曜、かつて一〇月二〇日）は、かけうちと呼ばれる踊り手（青、壮年二〇〜四〇名）が鬼面に赤熊を付け、濃紺の袴裃に股引、濃紺の襷に黒手甲、白足袋に草鞋履きで締め太鼓を首から下げ、両手に撥を持って打ちながら踊る。踊りは「大道」「せり込み」「鬼寄せ」などで、神社や福泉寺、村廻りと公民館で演じられる。囃子方は鉦打ち（青年女子一〇名）、大太鼓打ち（青年一名）、笛（壮年男子数名）で、ほかの役に鳥毛、綾竹などが加わって総勢数十人を越す。伝播経路は、江戸時代に諫早（長崎県）から飯田へ伝播し、さらに明治二年（一八六九）に飯田から伝えられたという。²² 地元ではこの浮立を豊年を祝う踊りとして理解しているが、福泉寺での踊りを大切にしていることも含めて、その芸態の根底には念仏踊りの要素が存在する。

東北地方の岩手県には種々の剣舞が分布し、鬼剣舞は北上市、江刺市、和賀郡、胆沢郡などに広く分布している鬼面をつけて踊る念仏剣舞の一種である。鬼剣舞という種目名で呼ばれるようになったのは明治三〇年（一八九七）頃であり、それ以前はモッケ・モッコ・モンコ（物の怪）などと呼ばれていた。踊り手は八名一組で赤熊に鎖帷子、大口袴に胸当て、手甲脚絆に草鞋履きの武士姿の扮装で演目によって扇・剣・御幣などを持って踊り、人数によって一人偉者・三人偉者・八人偉者などと呼ばれて隊列を入れ替えて踊る。

起源伝承は様々で坂上田村麻呂が悪露王の霊を慰めるために始めた、義経主従の亡魂を慰めるために踊ったなど、東

北地方で非業の死をとげた英雄の霊を救うことに結びつけられている。盆に鬼剣舞を踊り、モッケが救われたことで土地の人々も幸せになることができるという考え方であるといふ。⁽²³⁾

鬼の扮装をした者の集団踊である両者は念仏踊りと深く結びついた伝承であり、「(略) やすらいはなや やとみせはなまへ やすらいはなや やとみせはみくらの山に やすらいはなや やあまるまでなまへ (略)」⁽²⁴⁾ という念仏歌をうたいながら踊った平安時代末期のやすらい花の伝統を派生的に継承した芸能といえよう。

3 石川県の御陣乗太鼓・佐渡の鬼太鼓

御陣乗太鼓(石川県輪島市名舟)は、鬼面に浄衣をつけた若者達が一個の鉾留め太鼓を交代に曲打ちする太鼓芸で、多く伝承されている太鼓芸の古典的な存在である。土地の起源伝承によれば、天正四年(一五七六)に上杉謙信が能登に軍を進めて名舟に迫った時、村の青年達が井口城を守るために太鼓を打ちつつ敵陣に攻め入り、竹槍や農具で敵を退散させた戦勝記念として奥津姫神社の祭礼(現在七月三一日〜八月一日)に御輿の先導をし、以後太鼓の芸を伝承するようになったといふ。

鬼太鼓(新潟県佐渡)は伝承地の方言でオンデコと呼ばれ、佐渡で設立された同名の太鼓芸のプロ集団が有名であることから誤解される場合もある。伝承地によっては獅子舞と呼んでおり、獅子舞と組み合わせている場合が多く、鬼太鼓の役割は祭礼における御輿の先導や神社境内の祓い浄め、地域の各戸めぐりをして悪魔を祓うと同時に豊作祈願をしてまわり、その機能において獅子神楽と変わるところがない。芸態的には鬼面をつけ、胸当に手甲脚絆草鞋履きの武士様装束の鬼が、台に乗せた鉾留め太鼓(二名でかついで移動する)を一鬼が舞いながら打ち、ほかの鬼が裏打ちする独特の芸能である。

鬼の扮装で太鼓の曲打ちをする両者は御輿の先導役として位置づけられ、獅子神楽と同様に悪魔祓いの役割を負って

いる一方、悪魔祓いとは切り離れた場所で余興芸として演奏される場合も多い。

4 愛媛県の牛鬼

牛鬼（愛媛県宇和島市宇和津彦神社祭礼 一〇月二八日～二九日）は奇妙な怪物で、氏子地域を徘徊して家々をのぞいて廻り、悪魔払いをして祝儀を受けては首を左右に振って礼をする。これは牛と鬼を合体させた想像上の怪物で、内部に一〇人以上が入れる巨大な胴体を篋で作り、その上から赤い布と棕櫚の皮で覆う。移動しながら竹の笛をブーブー吹き鳴らすので、ブーヤレとも呼ばれている。土地の起源伝承では、加藤清正が異国出兵中にこの怪物を出現させて敵を威嚇したとか、大洲太郎が赤布を魔除けにしたのに始まるなどと伝えている。牛鬼だけが人間の体軀ではない姿であり、その役割は御陣乗太鼓や鬼太鼓と同じように獅子神楽と同様である。

八 摩陀羅神祭の鬼

1 京都府広隆寺の牛祭

牛祭（京都府向日市太秦広隆寺境内社大避神社 一〇月一二日、かつて九月一二日）は、摩陀羅神祭とも呼ばれ、国家安穩、五穀豊穣を祈願して行われている。祭礼当日広隆寺西門から金堂へ向かって行列を繰り出し、僧侶が扮する摩陀羅神と四天王（四鬼）は、紙の平たい面（魔陀羅神は人間の顔）に浄衣を着けて御幣を持ち、四天王は三股の鉾を持つ。金堂前に設けられた祭場で摩陀羅神が祭文を読み、終わると同時に四天王ともども金堂の中へ駆け込む。彼等につけた仮面を奪うと一年間の厄除けになると伝えられ、参詣者に襲われるのを逃れるためである。

この祭りの由来は、滋覚大師円仁が入唐の帰路航海の安全を祈って無事帰国できたことを感謝し、叡山西麓に大避神

社を祀った。この神社は後に広隆寺に移されたと伝えられているところから、行われている祭りである。

2 茨城県楽法寺のマダラ鬼神祭

マダラ鬼神祭（茨城県真壁郡大和村本木楽法寺 四月第一日曜に行われていたが、数年前から中断）は、境外で行列を整えた一行（住職・鬼〈赤・青〉多数・馬に乗ったマダラ鬼神・ほか）が境内に練り込み、住職が本堂前で護摩を焚き、これを囲んで大勢の鬼が踊る。鬼面に赤い鬼衣の上から紫の袈裟を掛けたマダラ鬼神が天に向かって護摩矢を放ち、これを拾った人は一年を無病息災で過ごせると伝えられている。

寺伝によれば、応永二年（一三九五）に兵火で寺が消失した時、マダラ鬼神が出現して住職を励まし、大勢の鬼を集めて七日七夜で本堂を建立した祝いとして鬼踊りをしたのに始まるという。⁽²⁵⁾

1と2の祭りは、異国の神であり仏教の守護神である摩陀羅神に従う複数の鬼が登場する形式である。前者が人間に近い装束の摩陀羅神であるのに対して、後者は鬼衣に袈裟の僧体であり、摩陀羅神の地方的展開を示している。

3 岩手県の蘇民祭

岩手県には摩陀羅神祭、または蘇民祭と称する正月行事が伝承されている。現存では毛越寺の二〇日夜祭のものが広く知られ、講中の特定な家柄の人々による献膳式・献膳上・どんと祭（松明を翳した講中の若者の行列が常行堂に練り込み、親族に背負われた七・五・三歳の子供が浄衣の背に鬼面を逆さにさげて加わっている）で構成されている。二〇日夜祭のこの部分は明治一五年（一八八二）に水沢市黒石寺のものを写したという。

水沢市黒石寺の蘇民祭（旧正月の七日〜八日）は、裸参り・火焚き登り・別当登り・袋登り・鬼子登り・蘇民袋の争奪で構成されている。鬼子は七歳の虚弱体質の子供が麻衣の背に逆さまに鬼面を負い、手に斧と槌を持って親族に背負

われ（本来は鬼面を付け、手を引かれて歩くものであったという）て薬師堂に登り、堂前で松明を跳び越して堂内に入る。その後講中の若者達は東西に分かれて五穀豊穡が約束されると伝えられる蘇民袋を奪い合う⁽²⁶⁾。ほかに花巻市矢沢の胡四王神社（正月二日）、江刺市井手の熊野神社（正月一四〜一五日）などでも盛大に行われている。

蘇民祭は日本において行疫神と考えられている牛頭天王が、南海に赴く途中一夜の宿を所望した時に裕福な兄の巨旦将来は拒み、貧しい弟の蘇民将来が快く受け入れたので、帰途巨旦一族を皆殺しにしたが、蘇民一族は子々孫々まで保護することを約束した。蘇民将来と記した護符を身につけたり門戸に貼ることで疫病除けになると信じられている。転じて牛王杖などと同様にこの護符を田畑にさして害虫除けとし、五穀豊穡を祈った。七歳の鬼子参りは、虚弱体質の子供が大人の仲間入りを契機として蘇民将来の一族であることを示し、牛頭天王（摩陀羅神）に健康な将来を祈願するのである。

九 千葉県広済寺の鬼来迎

鬼来迎（千葉県匝瑳郡光町虫生広済寺 八月一六日 かつて七月一六日）は盆の施餓鬼に付随した芸能であり、地元で鬼舞と呼ばれている。八月一六日の午後から本堂で施餓鬼があり、後に本堂脇の仮設舞台で演じられている。昭和四六年まではこの場所にあった地藏堂の行事で、崖崩れで地藏堂が倒壊したためその場所に仮設舞台を設けて演じるようになった。寺伝によれば、平安時代の末期に高野山の僧石屋が諸国行脚の途中当地に立ち寄り、地獄で苦しむ娘の姿を夢に見て救済を親に勧め、寺を建立して菩提を弔った。鬼来迎は、寺の建立に関わる縁起と地獄における亡者の苦しみを救済する本尊（地藏菩薩）の霊験譚で構成された宗教劇である。

全体は七段で構成されているが、現行は大序のあと浴衣を着流しにして杖を持った脱衣婆による幼児の虫封じがあ

り、二、四段を省略して亡者救済の部分だけが演じられている。また、病人は願って亡者の役を演じると病魔が退散すると信じられている。鬼（赤と黒）は鎧を着けて腰に太刀を帯びた武士姿で、太い六尺棒を持って亡者を責める。

ほかに浄福寺（千葉県香取郡小見川町）、迎接寺（同県下総町冬父）にもかつて鬼来迎と同様の芸能が行われており、両寺に残された記録では地獄芝居とともに本堂と地藏堂を結ぶ仮橋で菩薩来迎のお練りが行われていた。したがって、鬼来迎もお練りから派生した伝承と考えられるという。

菩薩来迎会は中央寺院で平安時代から行われていた行事であり、鬼来迎が菩薩来迎の地方的派生芸能の一種として唯一の伝承なのは貴重である。

おわりに

本論では各地に伝承されている民俗行事・民俗芸能に見る鬼の形態分類を行うために、できる限り数多くの資料を集めた。しかし、充分というにはほど遠いものであり、分類や考察にも不備部分が多い。たとえば、壬生狂言の「棒振り」に登場する棒振り役などは、明らかに仮面をつけた鬼から展開した役と考えられ、さらに現行風流踊にはさまざまな鬼形態の棒振り役が存在している。棒と芸能については、次の研究課題としている。

本論執筆に際して、多くの方々から資料提供ほかのご協力をいただいた。記してお礼申し上げる。青山宣章氏、門屋光昭氏、武井正弘氏、中村節子氏、仁尾洋子氏、根岸啓子氏、的場香澄氏、吉岡哲也氏、各伝承地の伝承者の方々。

注

(1) 『かげろふの日記』中「鬼やらひ」、『日本古典文学大系』20 岩波書店（一九五七年）二五三頁。

- (2) 「殿上人於長橋内射方相、主上於南殿密覽」(『江家次第』卷第十一 追儼 〈増訂故実叢書〉第十七回 今泉定介編 吉川弘文館 一九二九年)三四九頁。
- (3) 「無形文化財 正月堂の修正会」(現地発行パンフレット)。
- (4) 『竹崎観世音寺修正会鬼祭』(佐賀県藤津郡太良町教育委員会編・発行 一九八〇年)。
- (5) 『太宰府天満宮神事帳』(太宰府天満宮所蔵)には、四八ヶ所を縛られた鬼の表面図および横向き背面図が記されている(『天神絵巻』太宰府天満宮の至宝)。(太宰府天満宮文化研究所編・発行 一九九一年)。
- (6) 「久留米市大善寺玉垂宮の〈鬼夜〉調査メモ」(久留米市教育委員会文化部文化財保護課の吉岡哲也氏より寄贈されたもの 一九九五年)。
- (7) 『大分県文化財調査報告書』第三九輯 国東半島の修正鬼会(大分県教育委員会編・発行 一九七七年)。
- (8) 『長田神社古式追儼式』(神戸市教育委員会編・発行 一九九四年)。
- (9) 鹿谷勲「陀々堂の鬼はしり」(『近畿文化』三六八 一九八〇年)。
- (10) 朝鬼は近世初頭、例年実施の家勸請の祭りの折り、家主担当の役として加えられたという。
- (11) 『早川孝太郎全集』(宮本常一・宮田登編 未来社 一九七八年)二〇五～二〇九頁。
- (12) 山を割ることは世を開くことであり、本来山見鬼は大神楽の鬼なので役割が見えなくなっているが、古くは山見鬼が山神であり、禰鬼が荒神であった。
- (13) 映像人類学シリーズ 『日本の祭り』花祭り―愛知県北設楽郡東栄町月一の解説書(三浦庸子編 一九九三年 ヴィジュアルフォークロア)。
- (14) 八木洋行「日送りのおくないについて」(『懐山のおくない―国選択無形民俗文化財記録保存報告―』静岡県天竜市教育委員会編・発行 一九八六年)一四〇～一五二頁。
- (15) 『懐山のおくない―国選択無形民俗文化財記録保存報告―』(静岡県天竜市教育委員会編・発行 一九八六年)三八～四一頁。

第2表に示された現行演目欄の○印しが23で、筆者が本文に示した演目数が21なのは、表に示された演目名が安政本(安政二年へ一八五五)の銘あるおくないの詞章本、大石伝次家所蔵)ほかに記された演目名の故であり、表の32・33は現行⑬、表の40・41が現行⑭の演目に含まれているためである。

- (16) 『引佐町史』 民俗芸能編（引佐町編・発行 一九九五年）二三〇～三三一頁。
- (17) 「死繁昌」——広島県山県郡千代田町壬生の井上家蔵「荒平舞詞」（天正一六年（一五八八）に記された）岩田勝著『神楽源流考』（名著出版 一九八三年）四頁。
- 「死反生」——山口県濃郡鹿野町金峰 金峰神社（旧蔵主権現）「社家文書」（武井正弘氏の）教示による。
- 「三作岩戸神楽舞とその周辺」（演劇博物館創立六〇周年記念「周防・三作神楽の夕べ」パンフレット 一九八八年一月一二日の公演 於早稲田大学大隈講堂）。
- (18) 一九九五年六月九日（金）東京国立文化財研究所芸能部の「伝統芸能における鬼の実証的研究」に関する研究会の講師として来所された門屋光昭氏の発表による。
- (19) 山路興造「大念仏狂言考」（『演劇学』二五号 一九八四年）。
- (20) 「梁塵秘抄口伝集」巻第一四「梁塵秘抄」佐々木信綱校 岩波書店 一九六三年）一七〇～一七三頁。
- (21) 武井正弘「やすらい花」（映像人類学シリーズ『日本の祭り』やすらい花（ヴィジュアルフォークロア 発行予定）解説書原稿の教示による。
- 『都名所車』挿し絵（やすらいひ）（『新修 京都叢書』第五巻 刊行会編 一九六八年 臨川書店）五二七頁。
- 「内裏雛」やすらい花の祭（『新修 京都叢書』第二巻 刊行会編 臨川書店 一九七二年）六一四頁。
- (22) 『祭礼事典・佐賀県』（倉林正次監 佐賀県祭礼研究会編 桜楓社 一九九一年）九四～九六頁。
- (23) 注（19）に同じ。
- (24) 山路興造「やすらい花 再考」（『民俗芸能』68）七頁。
- (25) 『茨城の芸能史』（茨城文化団体連合編・発行 一九七七年）四三九～四四一頁。
- (26) 本田安次著『日本の民俗芸能』Ⅲ延年（一九六九年 目耳社）四七二～四七六頁。
- (27) 三隅治雄「鬼来迎について」（『鬼来迎』深田隆明編 鬼来迎保存会発行 一九七九年）。